

令和2年度
文部科学省委託調査

令和2年度「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」

青少年の体験活動の推進に関する調査研究

報告書

令和3年3月

株式会社浜銀総合研究所

I 調査研究の概要

1. 調査研究の目的・実施の背景等

(1) 本調査研究の目的

平成 25 年 1 月 21 日中央教育審議会答申「今後の青少年の体験活動の推進について」では、体験活動は人づくりの“原点”であるという認識の下、未来の社会を担う全ての青少年に人間的な成長に不可欠な体験を経験させるためには、教育活動の一環として、体験活動の機会を意図的・計画的に創出することが重要とされている。

また、平成 30 年 6 月に閣議決定された「第 3 期教育振興基本計画」においては、子供の健やかな成長のためには豊かな心を育むことが不可欠であり、そのために、社会体験活動や自然体験活動等も含め児童生徒の多様な体験活動の機会を充実することが重要であることが示されている。

体験活動の充実が、青少年の社会性や豊かな人間性の育成を図る上で非常に重要であることは、独立行政法人国立青少年教育振興機構（以下、「青少年機構」という。）が実施してきた調査研究等でも明らかにされており、これらの成果等については「発達段階に応じた望ましい体験の在り方に関する調査研究」（中間まとめ）（令和 2 年 3 月）（以下、「中間まとめ」という。）として整理されている。

ただし、青少年機構による調査は、主に、調査回答者が振り返って回答する子供の頃の経験の多寡と現在の回答者の意識等との関係性（相関関係）に着目したものとなっている。また、分析としては主に 2 変数間のクロス集計が実施されているが、例えば保護者の所得水準等、他の変数の影響を統制した上での体験の影響・効果について検討されているわけではないことから、より精緻な議論をするためには、これらの点も踏まえた分析を行うことが必要である。

そこで本調査研究では、国が実施する 21 世紀出生児縦断調査（平成 13 年出生児）の調査票情報（以下、「21 世紀出生児縦断調査のデータ」という。）を活用し、「体験がその後の状況に及ぼす影響・効果」に関し、下記の点を踏まえた分析を行った。これらを踏まえ、家庭による背景・環境、属性等の要因を踏まえた上でも、「多くの体験を経験した子供はその後の意識等が高い」ということを明らかにすることを試みた。

- ・過去に経験した体験とその後の意識等との関係という時系列的な関係性を明確に捉える
- ・家庭・保護者の状況等の差異も踏まえた上での体験活動などの影響・効果に着目する
- ・多様な「体験」に関し、その後の状況に及ぼす影響・効果について検討する

(2) 本調査研究の実施の背景（「体験活動」の定義・範囲や重要性等について）

「体験活動」の定義・範囲に関して、平成 19 年 1 月 30 日の中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」では、主として「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」とされている。

また、平成 25 年 1 月 21 日中央教育審議会答申「今後の青少年の体験活動の推進について」において、「体験活動」は、その内容に応じて大きく三つの体験に分類されている。「今後の青少年の体験活動の推進について」では、「体験活動は教育的効果が高く、幼少期から青年期まで多くの人とかかわりながら体験を積み重ねることにより、『社会を生き抜く力』として必要となる基礎的な能力を養うという効果があり、社会で求められるコミュニケーション能力や自立心、主体性、協調性、チャレンジ精神、責任感、創造力、変化に対応する力、異なる他者と協働したりする能力等を育むためには、様々な体験活動が不可欠である」とされている。

生活・文化体験活動：例えば放課後に行われる遊びやお手伝い、野遊び、スポーツ、部活動、地域や学校における年中行事。

自然体験活動：例えば登山やキャンプ、ハイキング等といった野外活動、又は星空観察や動植物観察といった自然・環境に係る学習活動。

社会体験活動：例えばボランティア活動や職場体験活動、インターンシップ。

出所)中央教育審議会「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」(平成 25 年 1 月 21 日)

この他、青少年機構の中間まとめでは、各種の調査結果を踏まえ、重要と考えられる活動の内容が「子どもの成長を支える 20 の体験」として、「体験を通じて育成したい 12 の資質・能力」とあわせて整理され、提示されている。

子どもの成長を支える 20 の体験

- | | | | |
|-----------|---------|-------------|----------|
| ・自然体験 | ・集団活動 | ・地域行事 | ・社会貢献 |
| ・職業体験 | ・文化芸術体験 | ・科学体験 | ・国際交流体験 |
| ・規則正しい生活 | ・お手伝い | ・遊び | ・運動・スポーツ |
| ・読書 | ・探求学習 | ・動植物とのふれあい | ・家族行事 |
| ・家族とのかかわり | | ・友達とのかかわり | |
| ・先生とのかかわり | | ・地域の人とのかかわり | |

体験を通じて育成したい 12 の資質・能力

- | | |
|-------------|--------|
| ・学ぶ力 | ・やり抜く力 |
| ・コミュニケーション力 | ・礼儀作法 |
| ・健康管理 | ・自己肯定感 |
| ・積極性 | ・協調性 |
| ・道徳観 | ・自立心 |
| ・勤労観 | ・公共心 |

出所)国立青少年教育振興機構「発達段階に応じた望ましい体験の在り方に関する調査研究～「体験カリキュラム」の構築に向けて～(中間まとめ)」(令和 2 年 3 月)

これらのように、体験活動などの重要性はこれまでも様々な形で捉えられ、主張されているところである。ただし、これまでの調査研究では、時系列的な因果の関係性が明瞭になっている分析や、家庭・保護者の要因等、他の変数の影響を統制した上での体験（活動）の影響・効果についての分析が必ずしも実施されているわけではないと考えられた。

そこで、本調査研究において 21 世紀出生児縦断調査という全国的で大規模な調査データを活用し、できるだけ多様な形で「体験」を捉え、従来の研究では十分に把握できていなかったことを明らかにすることを試みた。

Ⅱ 各調査の概要・まとめ

2. ヒアリング調査

(1) 調査の実施概要等

ヒアリング調査の対象は、「文献調査」の結果や、調査検討委員会の委員からの紹介等を踏まえて、活動の内容としてできるだけ多様な事例を取り上げられるように検討を行った。

本調査研究では下記の組織・団体を対象に調査を行い、それぞれ、「体験活動を実践して実感する効果、なぜそのような効果が得られると考えるか」、「体験活動の提供方法、指導・支援方法としてどのようなことが重要であるか」、「今後の推進に当たって意識していること、留意点等」について情報把握を行った。

ヒアリング調査は 60 分～90 分程度の時間で、オンライン会議システム、又は対面で実施をし、音声データにより記録をとった。対象別のヒアリング結果の概要については、本報告書の「参考資料」に一覧にして整理した（「2. 対象別のヒアリング結果概要」①～⑧）。

<ヒアリング調査対象一覧（調査実施順）>

	組織・団体名	実施している体験活動の内容・種類等
①	独立行政法人国立青少年教育振興機構	国立の施設等でのキャンプ等の体験活動、自然の中での遊び等の自然体験
②	公益社団法人国土緑化推進機構	森林環境教育を通じたレクリエーション等の自然体験、奉仕活動等の社会体験
③	特定非営利活動法人キッズドア	低所得・ひとり親世帯の子供を主たる対象とした職業体験、コンサート鑑賞やキャンプ等の体験
④	公益財団法人ラボ国際交流センター	ホームステイ先への訪問や国内への外国人の受け入れ等の国際交流体験
⑤	公益財団法人ハーモニセンター	ポニー等動植物とのふれあい体験、動物の世話も含めたキャンプ等の宿泊体験
⑥	新潟市農林水産部食と花の推進課	学習と農業体験を結びつけた農業体験学習（学校の授業の一環として実施）
⑦	株式会社ラボ教育センター	英語劇を通じての交流・学習活動、異年齢の集団でのキャンプ等の活動
⑧	特定非営利活動法人プレーパークせたがや	プレーパークでの自由な遊びを通じた交流・体験活動

参考資料（各調査・分析結果の詳細）

④ラボ国際交流センター

■ヒアリング対象・活動の概要

組織・団体名、氏名	公益財団法人ラボ国際交流センター 間島祐介様(代表理事)
ヒアリング日	2020年12月17日
ヒアリングで伺った活動の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ラボ国際交流プログラムでは、①ホームステイ先への訪問、②日本国内への外国人の受け入れ、③高校生留学、④海外インターン、⑤短期日本語研修者の受け入れを行っている。 ・国際交流事業の他に、外国人のための日本語教育活動と、言語学に関する調査・研究を行っている。

■体験活動を実践して実感する効果、なぜそのような効果が得られると考えるか

キーワード等	エピソード等
幅広い視野の獲得	<ul style="list-style-type: none"> ・ラボ国際交流の目的は、異なる言語や生活習慣に触れることにより、自国の文化との違いや共通点を見出し、幅広い視野を身に付けることとしている。 ・日本と外国での家族の在り方の違いや、同性・同年代の子供が大変な仕事をしていることを体感することによって、グローバルな視点を身に付けることができる。
他者への感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイを経験することで、今まで育ててくれた親や、忙しい中で自分を受け入れてくれたホストファミリーに対して、感謝の気持ちを持つことができる。
能動的に他者と関わろうとする態度	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイ中の共同生活やコミュニケーションにおいて、ホストファミリーに何かしてもらおうという受動的な態度ではなく、能動的に人と関わっていく態度が必要であると子供は気付く。 ・他者とのコミュニケーションにおいて、英語の能力だけではなく、相手に言葉を伝えようとする、又は相手を理解しようとする気持ちが重要であるということを学んでいる。
多様な他者と協働することによる社会力の育成	<ul style="list-style-type: none"> ・参加準備として合宿や他人の家に宿泊する体験を必ず課している。 ・異年齢の、話す方言も違う多様な人たちと生活をともにすることで、他者との違いや共通点を見つけ出すことができる。そのような体験を通して、他者への強い関心と愛着、信頼感を育み、社会力が育っていく。 ・また、多様な他者との濃密な交流を通じて、自分は何かしらの点で人の役に立てるという自己肯定感を育てることができる。
五感を使った体験が受容力を育成する	<ul style="list-style-type: none"> ・外国にあるもう1つの家族とともに生活しながら、子供が五感を使って直接肌で触れたり、見たり、聞いたりして、外国に住む人たちのことを学ぶことが重要である。 ・本やネットなどで知識を得るだけでなく、実際に体験することの方が、真実を知ることができるし、理解し、受容も大きい。

■体験活動の提供方法、指導・支援方法としてどのようなことが重要であるか

キーワード等	エピソード等
外国にきょうだいを作る	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイプログラムでは、同性・同年代のホストブラザー／ホストシスターがいることが特徴になっている。外国にきょうだいを作って、そこから仲良くなっていくということによって異文化への垣根を低くすることを想定している。
入念な事前準備	<ul style="list-style-type: none"> ・交流の準備として、自分を紹介するアルバムを作ったり、日本文化を紹介する準備をしたりして、コミュニケーションのきっかけにしている。 ・ホームステイ前に自分の生活や環境を客観的に振り返る機会を設けることで、受け入れ先での自分の行動を意識し、また他人のことを考えることができるようになる。 ・普段から、社会の中での自分の存在というものを認識させ、身の回りのことは自分でやる、積極的に様々な人とコミュニケーションを取るといったことを意識させている。 ・事前準備においては、保護者の理解も重要である。
10代前半での「ひとりだちへの旅」	<ul style="list-style-type: none"> ・中学1・2年生の、子供から大人へと成長しようとする時期に、親元を離れて一人で生活をすることで、自立への第一歩となる。 ・10代の前半は、多様な文化に対する許容力があり、いろいろなものに興味関心を持って受け入れることができる感性が豊かな年齢である。体験の中でしか学べないものを、この年齢の子供たちに提供することが重要である。
先輩への憧れによるモチベーションの涵養	<ul style="list-style-type: none"> ・国際交流に参加したいというモチベーションが子供自身にないと、プログラムの効果が薄くなってしまう。 ・モチベーションの涵養のためには、連綿と受け継がれてきた先輩方の言葉や態度に次の世代の子供たちが触れる機会を設け、先輩に対して憧れを抱くことが重要である。
子供の安全と健康の保証	<ul style="list-style-type: none"> ・外国に行く、又は外国の子供を受け入れるという点において、子供の安全と健康を最大限保証することに最も注力している。
目的を常に意識させることによる効果	<ul style="list-style-type: none"> ・国際交流の中で、全ての子供が、順風満帆に進むわけではなく、ホームシックになったり受け入れ先の家庭の中でうまくなじめなかったりする子供がいる。そのようなネガティブな態度になってしまった時は、自身の参加目的を再度思い出させることで、自ら考え、立ち直らせる。その中で、子供のレジリエンスが育っていく。 ・また、プログラムに参加する自身の目的を常に意識させることで、子供に対して自身の行動の責任性を求めていくことも、成長の1つであると考えられる。
受け入れ先への感謝を意識させる	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が国際交流プログラムに参加できているのは、ホストファミリーのお陰であり、感謝することを意識させている。感謝の気持ちがあれば、ホストファミリーに対して何をすれば喜んでもらえるかを考えるようになる。

■今後の推進に当たって意識していること、留意点等

キーワード等	エピソード等
全ての子供に機会が与えられるわけではない	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけたくさんの子供に国際交流プログラムに参加してほしいと考えているが、様々な理由から、全ての子供に機会が与えられているわけではないという前提に立って活動している。 ・訪問できない家庭でも受け入れはできるように、相互交流のプログラムを組んでいる。

(2) 調査結果から把握されたこと

①体験活動の影響・効果、及び活動内容との結び付きについて

ヒアリング調査からは、それぞれの体験活動の実施主体が、様々な形でその影響・効果を認識していることが把握された。体験活動の影響・効果に関しては文献調査からも把握・整理することができたが、活動の指導者等により語られるエピソード等から、よりリアリティのある形で把握することができた。

体験活動の影響・効果について、ヒアリング調査から把握されたキーワードを順に挙げると、「主体性」、「社会性（社会力）」、「自信」、「人とかかわる力（能動性、協働）」、「自己肯定感」、「豊かな感性」、「問題解決にかかわる力（問題を解決しようとする姿勢）」、「学びに向かうための『原体験』」、「ワクワク感」、「ストレスの軽減」、「将来への夢や希望」、「中退予防」、「幅広い視野」、「他者への感謝」、「受容力」、「忍耐力」、「思いやり」、「興味・関心」、「職業意識」、「挑戦」、「社会貢献」、「許容」、「自立・自律」、「繋がり」、「観察する力」、「身体機能」などがある。

これらについて類似の内容をまとめつつ、活動内容との結び付き方を整理すると、まず、「主体性」、「ワクワク感」、「興味・関心」、「挑戦」といったことは、自ら様々なことに関心を持って取り組んでいこうとする意識・態度であると考えられる。これらについては、自然の中での自由な遊び・活動や、新しいもの・未知のものに触れたり学んだりすることで培われていくものなのではないかと考えられる。

「社会性（社会力）」、「人とかかわる力（能動性、協働）」、「幅広い視野」、「許容」、「繋がり」、「観察する力」などは、他者との関係をつくっていく力や、また、そのかわりの中で自身のことを考える力であろうと考えられる。これらは、キャンプ等の体験活動を通じて集団での生活を経験すること、異なる年齢の人や異なる文化を持つ人と交流すること、自分一人ではうまくできない経験をするなどが関係していると考えられる。なお、「中退予防」ということも、これらの「他者との関係をつくっていく力」と関連が強いのではないかと考えられる。

「自信」や「自己肯定感」といったことに関しては、体験活動を通じて「何かが（自分の力で）できた」、「何か人の役に立つ経験ができた」ということが重要であると指摘されている。あるいは、他の子供たちがやっていることを経験したことがないと、それがコンプレックスになってしまうという説明があった。

「豊かな感性」、「問題解決にかかわる力（問題を解決しようとする姿勢）」、「学びに向かうための『原体験』」、「受容力」に関しては、何かを経験することが次に何かをする上でのベースとなるといった捉え方をされているものと考えられる。「主体性」、「ワクワク感」、「興味・関心」、「挑戦」のキーワードとも近いものであると考えられるが、より、「学ぶこと」や「問題を解決すること」との結び付きが意識されていると考えられる。自然の中での経験や、人間関係に関する経験など、様々な経験が、次に何かをする時の意識や態度に影響すると考えられる。

「ストレスの軽減」や「身体機能」は、心身の健康にかかわるものであると考えられる。自然の中での活動や自由な遊びが、これらの面で良い影響を及ぼすのではないかと指摘されている。

「将来への夢や希望」、「職業意識」は、職業体験等を通じて将来のことを思い描く・考えることにな

るといった形で説明されている。なお、その影響・効果の表れ方として、農業などの特定の産業・職業への意識が高まるといったことと、広く将来に明るい展望を持つことができるといったこととの両面があると考えられる。

「他者への感謝」、「思いやり」、「社会貢献」については、自身以外のものとの関係性についての意識・態度であると考えられる。これらは、「社会性（社会力）」、「人とかかわる力（能動性、協働）」、「幅広い視野」、「許容」、「繋がり」、「観察する力」のキーワードとも近いものであると考えられるが、人間関係が形成された上での、他者への心情・態度の表出の面を捉えているのではないかと考えられる。

「忍耐力」や「自立・自律」は、「できなかったことが次第にできるようになる」といったこととして捉えられているのではないかと考えられた。繰り返し経験する活動の中で子供の成長が見て取れるといった説明がなされている。

②体験活動の提供方法、今後の推進等に関しどのようなことが重要と考えられるか

上記のように、体験活動の影響・効果について様々に認識されていることが把握されたが、ヒアリング調査からは、「どのように体験させればよいか」や「体験では、どんなかかわりがあるか」といったことに関しても、様々な話を聞くことができた。

複数の対象から共通して聞かれたことの1つが、「多様性を経験する」ということの重要性である。「自然環境など変化するのが当たり前という環境の中で適応力を身に付ける」、「多くの大人とかかわることで社会には様々な人がいることを知る」、「異年齢の、多様な人たちと生活をともにすることで他者との違いや共通点を見つけ出す」といったように、置かれる環境やかかわる人々について、より多様な状況を体験させることが重要であることが指摘されている。

また、「子供が主体である」ということも複数の対象から聞かれた。関連して、大人としては「褒める」、「一緒に行く」、「教え込むのではなく引き出す」、「見守る」といったかかわり方が重要であることが指摘されている。特に幼児期の活動に関してそのような指摘がなされており、幼児期に様々なことを自分で「やれた」、「できた」という経験をすることが重要なのではないかと考えられる。

他方で、主に小学生以降の時期に関しては、「学習と結び付ける」ということの重要性も指摘されている。教科と結び付きのある内容を体験することや、事前・事後の学習をしたり、活動の目標・テーマを意識させたりすることが、活動の効果をより高めることになるのではないかと考えられる。

機会の提供に関しては、障害を持っている子供や経済的に豊かでない家庭の子供など、どのような子供にも体験の機会を提供することが重要であることが指摘されている。現状ではこれらの点で機会の差があるということでもあり、問題意識が持たれていることも伺える。これらの課題への対応という点も含め、今後機会の充実を図っていく上では、地域との連携により活動を推進する視点も重要であること、学校教育の中で体験の機会を提供していくことも重要であること、より身近な場面でのかかわり等を意識することも重要であることなどが指摘されている。

(2) 調査結果から把握されたこと

①「家庭による背景・環境、属性等」を踏まえた「体験」の影響・効果について⁴

分析内容「A」として、「体験」と「家庭による背景・要因・属性等」について、それぞれの項目・変数によるクロス集計を行うと、概ね、父母の収入や学歴の水準が相対的に高い方が、子供が様々な体験をしているという関係にあることが把握された⁵。

また、分析内容「C」に関し、多くの場合、「体験」と「意識等」との間には正の関連性があることが把握されるが、同様に、分析内容「B」に関し、「家庭による背景・要因・属性等」と「意識等」の間にも、多くの場合正の関連性が見られている。

このような関係性が見られることを踏まえ、本調査研究では、分析内容「D」として、「体験」と「意識等」との間関係が「家庭による背景・要因・属性等」による疑似的なものではないのかということについて検討を行うため、回帰分析を実施した。分析の結果、家庭・保護者による影響を踏まえた上で、それとは別に、小学生時期の体験がその後の高校生等の時期の意識等の在り方に影響を及ぼしていることが明らかになった。今回の分析により、小学生時期に経験したことが、一定の時間を経た後も、ポジティブな影響・効果を及ぼしていることが示された。

回帰分析の結果を踏まえて、分析内容「E」として、さらに父母の収入の水準別に分類した上で実施した分析でも、概ね、「体験」と「意識等」との間には正の関連性があることが把握された⁶。分析により、収入の水準が相対的に低い家庭の子供であっても、体験をする機会が比較的多くあった子供はその後の意識等の水準が高い傾向にあることが明らかになった。また、一部の分析（例えば図表 8-4-1、図表 9-4-1、図表 10-4-1）において、体験がその後の意識等の水準に影響する度合いが、収入の水準が相対的に低い家庭の子供に関して特に高いのではないかと考えられるような結果も得られた⁷。

父母の収入や学歴の水準等により「体験格差」があることが懸念される場所であるが、機会に恵まれない子供たちに体験の機会を提供することが重要であり、また、効果的であるということを示唆する結果が得られたと考えられる。

⁴ 本調査研究では、回帰分析により「家庭による背景・環境、属性等」の影響を踏まえた上での体験活動の影響・効果について検討を行っているが、「実験群と統制群を比較した研究」や「活動の前後を比較した研究」ではないことにはあらためて留意されたい。また、回帰分析の結果について、いずれも決定係数の値が高いわけではないという点にも留意が必要である。なお、決定係数の値が低いことについては、過去の体験活動とその後の意識等との関係を分析したものであることや、体験活動は保護者の回答で意識等は子供本人の回答であるということも影響しているのではないかと考えられる。

⁵ ただし、「遊び」に関する項目については逆の傾向が見られ、父母の収入や学歴の水準が相対的に低い方が多様な相手・多様な場所で遊んでいる割合が比較的高い。

⁶ 本報告書では、第 8 回調査の自然体験・社会体験・文化的体験に着目し、等価世帯所得の水準による分類別の回帰分析・クロス集計・平均値差の分析（分散分析）を追加的に行った。

⁷ 本調査研究では、「体験はその後の意識等に影響・効果を有するか」、また、「どのような体験がその後の意識等に影響・効果を有するか」ということについて一定の分析結果を得ることができたと考えられるが、「どのような体験活動をどのようなタイミングで実施することがより効果的であるか」といったことや、「体験活動がどのような子供たちに対してより効果的であるか」ということについて、一部分分析を試みてはいるが、十分に検討ができたわけではない。調査実施時期が異なる回のデータを様々に組み合わせる分析を行うことや、回帰分析の結果から把握される係数の大きさ等に着目するなど、今後別の観点からのアプローチでの分析を行うことも検討するのではないかと考えられる。

②多様な「体験」の影響・効果について

また、本調査研究の分析により、体験とその後の意識等との間の結び付き方は、「体験」の内容によって様ではないことも明らかになった。

回帰分析の結果により、例えば、「自然体験」は、「自尊感情」や「外向性」等については正の関連性が見られたが（図表 8-3-3、図表 8-3-4、図表 9-3-3、図表 9-3-4）、中学生・高校生の時期の「向学校的な意識」との関連性は統計的に有意なものではなかった（図表 6-3-3、図表 6-3-4、図表 7-3-3、図表 7-3-4）。他方で、「社会体験」については、例えば「自尊感情」との関連性は有意ではないが、中学生・高校生の時期の「向学校的な意識」との関連性は見られるという結果となっており、体験の内容によって影響・効果の表れ方が異なるということが示唆されている。なお、「文化的体験」については、第 8 回調査時点・第 12 回調査時点ともに、今回「意識等」として着目したいずれの項目・指標に対しても、正の関連性が見られることが明らかになった（図表 14-1、図表 14-2 など）。

「遊び」については、特に遊び相手の多様性（年上、年下、家族以外の大人と遊ぶか）と意識等との関連性がより明瞭に見られ、これら多様な相手と遊ぶ機会があった者の方が、その後様々な意識等が高いという結果になっている（図表 14-3 など）。このような結果はヒアリング調査の結果とも整合的であり、「多様な他者」との交流が重要であることが示唆される結果となっている。

「読書」については、「向学校的な意識」について、小学生・中学生・高校生の各段階で正の関連性が見られる（図表 5-3-6、図表 6-3-6、図表 7-3-6）。「自尊感情」、「新奇性追求」、「感情調整」、「肯定的な未来志向」についても正の関連性が見られるが、「外向性」と「心の健康」については有意な関係ではない（図表 14-4、図表 9-3-6、図表 13-3-6）。確かに、特に「外向性」との関係については読書活動との関連性は想起しにくく、活動の影響・効果について、その特性が表れた結果となっているのではないかと考えられる。

「お手伝い」については、今回「意識等」として着目したいずれの項目・指標に対しても、正の関連性が見られるという結果であった（図表 14-5 など）。回帰分析において、幼少期の「父母の年収」や「父母の学歴」、「親子のかかわり・しつけ」等の要因を踏まえた上でも見られた影響・効果であることから、その後の段階での「お手伝い」が別途重要な意味を持っていることが伺える。データ分析から明らかにされたことではないが、ヒアリング調査結果を踏まえると、例えば、お手伝いを通して子供は「誰かの役に立つ」、「他者から褒められる」という経験をしており、そのことがその後の意識等に影響している、という可能性があるのではないかと考えられた。

4. 全体を通じたまとめ、考察

本調査研究で実施した調査・分析の結果から、様々な観点から、あらためて、青少年にとって「体験」が重要であることが示された。

文献調査は先行研究の内容について参照・情報整理したものであり、先行研究によっても様々な形で「体験活動の影響・効果」について調査・分析がなされていることを示した。その上で、ヒアリング調査では、それぞれの体験活動の実施主体が様々な形でその影響・効果を認識していることが把握され、語られるエピソード等から、活動内容と影響・効果との結び付きについて、よりリアリティのある形で把握することができた。

文献調査・ヒアリング調査の結果を受けて実施した 21 世紀出生児縦断調査のデータ分析では、家庭・保護者による影響とは別に、学童期の経験が、その後一定期間を経た青年期における意識等と関連性を有することが明らかになった。

また、今回着目した「自然体験」、「社会体験」、「文化的体験」、「遊び」、「読書」、「お手伝い」が、それぞれ異なる形でその後の意識等と結びついていることが明らかになり、子供たちに多様な形で体験の場や機会を作っていくことが重要であるということも確認された。

本調査研究を通じて、「体験」が充実している子供については、その背景として、父母の収入や学歴が高い傾向にあることも把握された。一般的に、体験の場や機会が提供される度合いには、これら家庭の要因によって格差があるものと考えられる。ただし、父母の収入が相対的に低い家庭の子供であっても、体験の機会が多くあった子供については、その後の意識等の水準が高い傾向にあることも本調査研究の分析により明らかになっている。また、一部の分析においては、体験がその後の意識等の水準に影響する度合いが、収入の水準が相対的に低い家庭の子供に関して特に高いのではないかと考えられるような結果も得られた。

今後は、子供が置かれている家庭環境等によらず、全ての子供が十分な体験を経験できるよう、環境等の差異も踏まえた上で、子供の生活環境の中に体験の機会を創出・提供していくということが、青少年の成長において重要であることが示されたと考えられる。家庭環境等による「体験格差」があるからこそ、機会に恵まれない子供たちに体験の機会を提供することが重要であり、また、効果的であるのではないかと考えられる。

今後機会の充実を図っていくということに関し、ヒアリング調査では、地域との連携により活動を推進すること、学校教育の中で体験の機会を提供していくこと、より身近な場面でのかかわり等も意識することなどが重要であることも指摘された。また、「どのように体験させればよいか」や「体験では、どんなかかわりがあるか」といったことに関し、「多様性を体験する」、「子供が主体である」、「学習と結び付ける」といったキーワードにより、「質的な側面」で重要と考えられることも明らかになった。

これら本調査研究で整理された情報や得られた分析結果を基に、更なる取組の充実等が期待される。